

創作ノート

電子音響と映像を用いた音楽作品の再解釈について
～武満徹『Corona』(1972)を事例に

About Reinterpreting Musical Composition using Electronics and Video
— “Corona” (1962) by Toru Takemitsu as an Example

林賢黙

Hyun-Mook Lim

情報科学芸術大学院大学

Institute of Advanced Media Arts and Sciences

概要

武満徹(1930-1996)の図形楽譜による自由な解釈が可能な『コロナ』(1962)は「(複数の)鍵盤楽器のための」といった編成から見ると、特に電子メディアを併用して演奏されることを前提として作曲されたものではない。しかしだからこそ、1962年に作曲されたこの作品を、丁度60年経った2022年の今の時点で、今のテクノロジーと問題意識を持って再解釈し、新たな音楽的・社会的意味を発見することができるのではないだろうか。本論考ではそのような意図を持ちつつ、ピアノと電子音響と映像のための編成として『コロナ』の再解釈を試みる。

“Corona” (1962) for pianist(s) by Toru Takemitsu(1930-1996), which is a variously interpretable composition from its graphic notation, could be barely assumed as work with electronic media, as it is instrumented “for keyboard instrument(s)”. But because it’s scarce assumability, couldn’t we find another musical, social meanings in this piece from 1962, by using contemporary technology in 2022(which is exactly after 60 years from the composition date)? With this intention, I would like to try on reinterpreting “Corona” with instrumentation of Piano, electronics, and video.

1. 背景

COVID-19(新型コロナウイルス)が世界的に広がってからおよそ3年の時間が経っている。もう『コロナ』という単語は新型コロナウイルスそのものを象徴する略語のように世間に通用されている。多くのコンサートや展示が中止や延期になり、コンサート場の状況も大分変わってきた。しかし、だからこそ、この時代できる演奏について考えられるのではないだろうか。1962年の

武満徹と杉浦康平が見ていた『コロナ』の言葉を2022年の今の視線を持ってどのように読み直せるのか。新型コロナウイルス拡散事態が納まる気がしない現在、60年前のこの作品をどこまで新しい意味をもって再解釈できるか。『コロナ』の再解釈の試みはこういった目的を持って始めた。なおこの試みは情報科学芸術大学院大学(IAMAS)の時間性を基にするメディア作品の可能性を試みる《Time Based Media》プロジェクトの一環としても実践されており、新型コロナウイルス拡散事態になる以前の過去、現在、そしてあり得る未来という時間の直線性(過去→???[未来])を重ね合わせることを演奏・解釈の主な重点とした。

2. 事例『コロナ』について

武満徹の(複数の)ピアニストのための『コロナ』(複数の鍵盤楽器のために)は1962年、デザイナーの杉浦康平との協業によって作曲された図形楽譜の作品である。この作品について武満は音楽的に必要な最少の指示のみ与え、残りの空間的按配はすべて杉浦により制作された。

ここでこの作品が想定する『コロナ』のイメージは太陽から観測される天体現象であり、太陽の外側から噴出されるフレアのイメージを持って制作されている。このようなコンセプトは、後で作曲された『コロナII』が紹介されている1962年度の雑誌『美術手帖—現代のイメージ』にて、コロナ現象の写真を楽譜と併に掲載することによりはっきりと主張されている。

『コロナ』は合計5ページの図形楽譜から構成され、それぞれの図形楽譜に該当する読み方や奏法などが書かれている指示書が添付されている。但し、最後の『白』のページだけ指示書が書かれておらず、その分他のページより可能な限り自由な解釈が可能である。各指示書の詳細は下記のようなものである。

それぞれの研究の指示により、演奏者は自由に、必要であれば同じ曲を繰り返しながら演奏する。それぞれの曲は順番に演奏してはならない。さらに、演奏者はすべての曲を演奏しなくてもよい。幾つかのページは互いに組み合わせられ、演奏者はそれぞれのページのテンポに従いながら全体を演奏する。演奏はどの時点で初めても良い。なお、時計回りか反時計回り、どの方向に進んでも良い。多種の鍵盤楽器を用い、ピアノと同時に演奏するのが望ましい(チェレスタ、チェンバロ等) 振動のための研究、できるだけ遅く、青抑揚のための研究、2分、或いは4分、赤分節のための研究、できるだけ早く、黄表現のための研究、1分、3分、或いは5分、灰会話のための研究、自由なテンポで、白

*(2016年の出版本の指示書より [筆者訳])

指示書の通り、この作品はそれぞれ青、赤、黄、灰、白の5枚の正方形のページに構成され、それぞれのページは「振動 (Vibration)」、「抑揚 (Intonation)」、「分節 (Articulation)」、「表現 (Expression)」、「会話 (Conversation)」のそれぞれのテーマのための研究 (Study) として作曲されている。つまりこの作品は、図形楽譜に感応してそれぞれの研究の持つテーマの表現法を拡張するための練習曲集ともみられるだろう。それぞれの5枚のページはまた、ページの上段から中心軸までの切れ込みにより、互いに楽譜を組み合わせることで読むことができる。

つまりこの作品は演奏の組み合わせ方や演奏法、楽譜の読み方向、演奏者数、楽器数などがすべて演奏者の自由に委ねられており、他には必要な事項としては、最小限の記譜の読み方や音楽的指示に従うことが要求される。同じページは何回も繰り返すことができ、演奏時間は演奏者によって多様に決められる。

3. 『コロナ』の再解釈

電子音響による『コロナ』の再解釈の試みが以前に全く無かった訳ではない。時代の流れによる技術の発展と思考方式の変化により、既に多様な解釈法が様々な演奏者によって提示されている。例えばアダム・テンドラー (Adam Tendler) は演奏の途中でラジオを再生し、ルカス・ハウスマン (Lukas Huisman) は電子音演奏者との二重奏を試みた。この上に、筆者は今までは試みられていなかった映像メディアの使用を加え、『コロナ』を解釈するに当たっての新たな視点を提示しようとした。

3.1. 初期設定 (『会話のための研究』を中心に)

この再解釈において一番重要な所は『白 (会話のための研究)』の楽譜である。この作品は図形楽譜である以上、演奏においての多くの自由が保障されているが、

楽譜に表示されている様々な記号に対する厳格な指示に従わなければならないため、自由に演奏できる余裕の空間は余り存在しない。一方で『白』には図形楽譜のみ提示されており、それに対する指示書は何も書かれていない空白のままに置かれている。杉浦は『白』の楽譜について「これまでの4つの要素の断片が白い紙の上に白インクで刷られている」¹と述べているが、むしろ指示書のないこの楽譜では、他の4つの研究の指示を、新たな文脈で自由に演奏出来る意味でも読み取れるだろう。

つまりこのページでは、どここの部分を鍵盤奏法や内部奏法等で演奏し、どここの部分で電子音響や映像メディアを出力するかについて初期設定を行うことが重要案件である。従って本作品の再解釈に当たって、筆者は『白』の楽譜を中心にどの図形をどのように演奏し、どのタイミングで電子音響や映像を出力するかを予め設計した。

3.2. Pure Data によるパッチの制作

この企画において、エンジニアを持たず、演奏者1人による自由な演奏システムを作るため、Pure Dataを用いた演奏用パッチを制作した。パッチの制作にあたって、一つのスクリーンでパッチと楽譜を同時に見るための、なお観客に図形楽譜の読み取りの仕組みを見せるための楽譜の出力と、なるべく最低限の動線・操作による電子音響や映像の出力を重点として作業した。

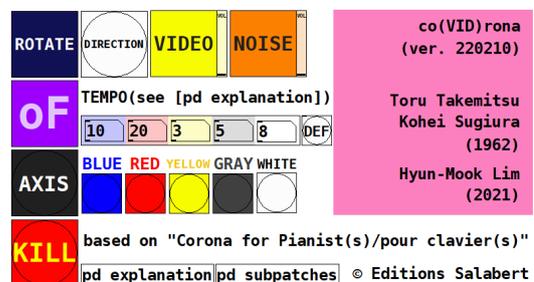


図 1: Pure Data で制作した演奏用パッチ

パッチは機能によって幾つかのボタンによって構成される。「oF」ボタンの操作によりメインスクリーンが表示され、その右下の「BLUE」から「WHITE」までの5つのボタンの操作によって各色に該当する楽譜が表示する。スクリーンには楽譜を読み取るための半透明の扇形のガイドが表示され、ガイドが楽譜上に重なる所を見ながら演奏する。ガイドは「ROTATE」ボタンにより回転し、「DIRECTION」ボタンにより方向

¹ 武満徹他、『武満徹全集第2巻—作品ガイド』、小学館：東京、2004年、49頁。

が変更される。見方によっては「AXIS」ボタンによりガイドは止まったまま、その代わりに楽譜を回転させることも出来る。「TEMPO」欄下のナンバーボックスをドラッグして各色当たり回転するガイドの速度を変更でき（つまり、これが作品のテンポとなる）、「DEF」のボタンで初期値に戻せる。望むタイミングに合わせて「VIDEO」ボタンで映像を、「NOISE」ボタンで電子音響を出力し、複数の映像・音源サンプルがランダムに出力される。それぞれサンプルの音量は「VIDEO」、「NOISE」ボタンの隣の「VOL」スライダーで調整できる。予期できぬ事故の際には「KILL」ボタンを押してすべてを初期値に戻す。すべての操作はタブレットによる OSC の無線通信操作で行われ、万が一インターネットを利用できない等の理由により、OSC を操作できない環境に備え、パソコンのキーボードでも操作できるようプログラミングした。

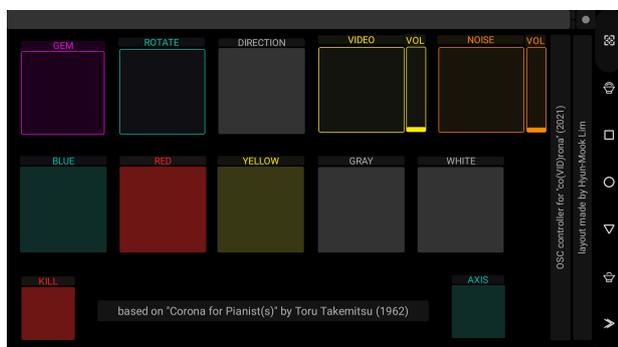


図 2: OSC 操作のためのアプリ『TouchOSC』で画面を操作し、無線通信で OSC 入力信号を送って Pure Data のパッチを操作する。

3.3. 再解釈の素材

『コロナ』の再解釈において、電子音響の素材は複数のノイズやグリッチのサンプルをランダムに再生した。映像の素材は主に、1955 年放送された風邪予防のためのアメリカのドキュメンタリー映像『すすりどくしゃみ (Sniffles and Sneezes)』の幾つかの場面からサンプルを抜粋し使用した。この映像を素材として使用した主な理由は、同じくウィルスによる疾患に対処する過去の人類の記録から現在を投影するという時間性を表現したかったためである。結果的にこの再解釈はノイズとグリッチ、ドキュメンタリー映像の音とそのビジュアルとの協演となる形となった。

4. 終わりに

再び、「なぜ『コロナ』なのか」に対する質問に回帰してみる。杉浦は『コロナ』の楽譜に対して一方、「赤

青黄灰白の色彩は記譜の形態と結びつくが、同時に異なった時間を提示する」²と述べている。この「異なった時間」を、「異なった時代の歴史」、つまり過去と現在の混在として解釈することも可能ではないだろうか。また、杉浦は「その上にそっと置かれた 2 重の輪は、例えば噴流する紅彩であり、さまざまに異なる発声をする唇でもある」³とも述べているが、つまりその上、『コロナ』という唇を經由し、過去の時代から何を考え、今の時代をどのように乗り越え、未来に向けるべきかに対する会話 (Conversation) を発生させることのできるのではないだろうか。コロナウィルスの時代に『コロナ』を読み直すこと、それは過去の死者や未来の可能的な人類への会話であり、現在に置かれた状況への会話であり、この作品の在り方自体に対する新たな会話への「研究」である。

高橋悠治は 1973 年のレコーディングのライナーノートの中、11 年前の初演を回想しながら、「この曲は、1962 年のぼくのリサイタルへの、かれのおくりものだった。そのときは、作曲家・一柳慧とふたりで演奏した。10 年後のこの演奏は、当時とまったくちがう方法でなされる。おそらく作曲者も予知しなかったような可能性の発見であり、したがって演奏者から作曲家へのおくりものである」⁴と述べている。それからまた 49 年の時間が経ち、当時より作曲家も、演奏者の高橋も全く予知できない方法で様々な演奏が行われている。そして正に今、作曲家の生前では全く予知していないはずのこの時代、この作品の演奏においての新たな可能性を提示することこそ、今はもうこの世を去ってしまった作曲家に対する新たなおくりものを伝えることではないだろうか。この企画は、そのための新しい「会話のための研究」でもある。

参考文献

- 高橋悠治 (1973) *MINIATUR III: ART OF TORU TAKEMITSU*, Deutsche Grammophon Gesellschaft.
- 武満徹 (1972) *Corona for pianist(s)*, Editions Salabert
- 武満徹 (2016) *Corona for pianist(s)*, Editions Salabert
- 武満徹他 (2004) 「武満徹全集第 2 巻—作品ガイド」小学館.

² Ibid, 48 頁

³ Ibid

⁴ 『MINIATUR III: ART OF TORU TAKEMITSU (高橋悠治, 1973, Deutsche Grammophon Gesellschaft)』の演奏者自身によるライナーノートより、3 - 4 頁。

5. 参考作品

武満徹 (1962) 「コロナ」、(初演) 1962.02.02 草月
アートセンター

6. 著者プロフィール

Hyun-Mook LIM

主に現代音楽を演奏するピアニスト・パフォーマンスアーティスト。現代音楽の演奏を始めた以来、数々の作曲家と協業しながら作品を初演・演奏し、或いは献呈されている。現在岐阜県に滞在しながら韓国と日本両方を中心に活動し、最近はフィクスド／ライブ・エレクトロニクスとピアノのための電子音響音楽作品を用いた演奏経験の拡張を中心に集中して演奏活動を続けている。



この作品は、クリエイティブ・コモンズの表示 - 非営利 - 改変禁止 4.0 国際 ライセンスで提供されています。ライセンスの写しをご覧になるには、<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/> をご覧頂くか、Creative Commons, PO Box 1866, Mountain View, CA 94042, USA までお手紙をお送りください。